2018 春の Art Collection

原勝郎 と 板倉鼎

HARA Katsuro et ITAKULLA Kanae

Paris, différentes vues

原勝郎《モンマルトル》

板倉鼎《巴里風景》

それぞれの巴里

2018/平成30年 4月21日㈯ ▶ 7月8日㈰

千葉県立美術館第１・２展示室

開館時間　午前９時～午後４時30分

休 館 日　毎週月曜日(4/30㈪は開館し翌日休館)

入 場 料　一般300(240)円／高校・大学生150(120)円（）内は20名以上の団体料金
中学生以下・65歳以上・障害者手帳をお持ちの方と介護者１名は無料

同時開催

第３展示室
浅井忠７ 明治150年
-浅井忠のドローイング-

第８展示室
ガラス工芸の魅力
-光と色彩の饗宴-

千葉県立美術館 〒260-0024 千葉市中央区中央港1-10-1
TEL 043(242)8311 FAX 043(241)7880
http://www2.chiba-muse.or.jp/ART/

千葉県立美術館
Chiba Prefectural Museum of Art

2018 春の Art Collection

原勝郎と板倉鼎

それぞれの巴里

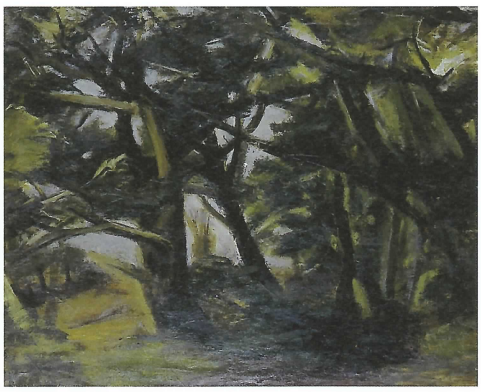
20世紀初頭、パリには多くの芸術家が動機もさまざまに集い、活動しました。本展では、当館所蔵作品の中から、1920年代にパリに渡った、千葉県ゆかりの原勝郎と板倉鼎の二人を取り上げます。

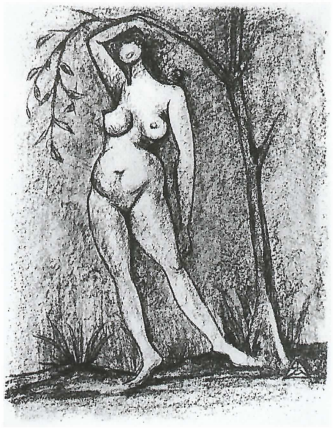
原勝郎は、千葉県山武郡（現在の大網白里市）に生まれました。葵橋洋画研究所で学んだ後、1922年パリに渡り、ベロニー街(現・アルソンヴァル街)にアトリエを構えます。ここは、古くから日本人に馴染みの深いアトリエ村で、彫刻家で文筆家の高田博厚も住んでいました。パリではサロン・ドートンヌやサロン・デ・ザンデパンダン等に出品。また、彫刻家の木内克と親交を深め、帰国後も一緒に展覧会を開催しました。

板倉鼎は、旧制千葉中学で堀江正章に学んだ後東京美術学校を卒業、1926年パリに渡りました。アカデミー・ランソンでロジェ・ビシエールに師事する一方、黒田重太郎の『構図の研究』を取り寄せ、熱心な構図研究を行い独自の画風を展開しました。パリではサロン・ドートンヌ等に出品しましたが、1929年には敗血症を発症し、帰らぬ人となりました。

本展では、原勝郎と板倉鼎の油彩画及びスケッチを関連作家の作品と共に紹介します。

2018/平成30年 4月21日㈯▶7月8日㈰ 第1・2展示室





上段左から
原勝郎《街灯のある風景》1930
原勝郎《森（A）》1955
板倉鼎《金魚と雲》1928

中段左から
板倉鼎《裸婦》1929
木内克「石版画三葉集」《樹下の裸婦》1977
黒田重太郎《女と小犬》1928

下段左
中西利雄《トリエール・シュール・セーヌ》1930

いずれも千葉県立美術館蔵

- 千葉県立美術館へのアクセス -

▶電車・モノレール
ＪＲ京葉線・千葉都市モノレール千葉みなと駅下車徒歩約10分
▶バス：千葉駅西口《26番のりば》千葉みなとループバス／タワーコース
千葉ポートタワー行「県立美術館入口（千葉みなとリハビリ病院）」
下車徒歩約３分

千葉県立美術館 〒260-0024 千葉市中央区中央港１-10-1
TEL 043(242)8311 FAX 043(241)7880
http://www2.chiba-muse.or.jp/ART/

✽同時開催 2018 春の Art Collection✽

第３展示室

明治150年 近代洋画の先駆者 **浅井忠７**
―浅井忠のドローイング―

浅井忠《曳舟通り》1885

浅井忠は自らの制作において柔軟な姿勢で様々な作風を展開しましたが、とくにドローイングにおいては洋画、日本画といった枠では捉えきれない多様な表現を行いました。浅井忠シリーズの７期目となる本展では、浅井の線描の魅力を様々なジャンル、観点から紹介します。

第８展示室

ガラス工芸の魅力
―光と色彩の饗宴―

藤田喬平《ヴェニス賛歌》1983

変化に富んだ形態、素材の持つ透明感や色彩の輝き、ガラス工芸作品は華やかな雰囲気が魅力です。本展では、近代日本のガラス工芸に確固たる足跡を残した、各務鑛三、岩田藤七、藤田喬平、石井康治に焦点をあて、魅力溢れる世界を紹介します。